ブラジルのビール価格、10月に0.24%下落 同月の下落は2018年以来

12カ月間の上昇率は3.79%に鈍化し、ビール価格がブラジルの総合インフレ率を下回ったのは2025年10月以来

2026年11月16日（月）



ブラジルで家庭消費向けに購入されたビールの価格は10月に0.24%下落した。同月の価格下落は2018年以来で、12カ月間の上昇率も3.79%に鈍化した。ブラジル地理統計院（IBGE）のデータによると、これによりビール価格の上昇ペースは、家庭で消費される食品とブラジル全体の消費者インフレ率のいずれも下回った。

家庭消費向け食品は10月に1.31%上昇し、12カ月間では5.75%上昇した。同期間のビールの上昇率は3.79%だった。IBGEのデータでは、家庭消費向け食品のインフレ率がビールを上回るのは2025年9月以来。2月にはビール価格が12カ月間で6.07%上昇する一方、家庭消費向け食品は前年同月比で0.09%安くなっており、状況は大きく変わった。

10月の数値により、ビールのインフレ率は3カ月連続で鈍化した。家庭消費向けビールの12カ月間の上昇率は、8月が5.46%、9月が4.82%、10月が3.79%だった。これにより、上昇率は中銀のインフレ目標レンジである3%と、許容上限の4.5%の範囲内に戻った。

月次価格が下落したことで、数年来続いていた傾向にも終止符が打たれた。家庭消費向けビールの価格は2019年から2025年まで、毎年10月に上昇していた。2026年10月は、2018年以来初めての同月下落となった。

ブラジル全体のインフレ動向は、よりまちまちだった。主要な消費者物価指数であるIPCAは10月に0.14%上昇し、12カ月間では4.63%上昇した。IBGEによると、月次の上昇率が抑えられた一因は、グリーン料金フラッグの再適用後に電気料金が1.92%下落したことだった。このため、家庭消費向けビールの12カ月間の上昇率が総合インフレ率を下回るのは、2025年10月以来となった。

家庭外でのビール価格も比較的落ち着いていた。バーやレストランでは、ビールは10月に0.11%上昇し、外食向け食品の上昇率0.36%の3分の1未満にとどまった。家庭外で販売されるビールは12カ月間で4.04%上昇し、総合IPCAを18カ月連続で下回った。

すべての飲料が同じ動きを示したわけではない。IBGEが一括して集計する清涼飲料水とミネラルウォーターは、家庭消費向けが10月に0.22%上昇し、12カ月間では5.63%上昇した。ビールよりも食品の上昇率に近い動きとなった。

ビール価格の上昇鈍化は、ブラジルのビール市場における価格設定、販促、利益率、売上高見通しに影響する可能性があり、ビールメーカーや卸売業者、小売業者の判断材料となり得る。データは消費者価格の一部に落ち着きが見られることを示す一方、地域によるばらつきが残り、食品サプライチェーンの他の部分では依然としてコスト圧力にさらされている市場の姿も浮き彫りにしている。

IBGEは、食品価格の上昇圧力の多くが基礎的な食料品に起因すると説明した。トマトは10月に19.57%上昇し、タマネギ、コメ、食肉も値上がりした。IBGEでIPCAを担当するフェルナンド・ゴンサルベス氏は、過度の降雨が一部食品の供給に打撃を与え、ディーゼル価格の上昇も生産と流通の各段階で圧力を強めたと述べた。

10月の地域別ビール価格は、地域によって明暗が分かれた。IBGEが家庭消費向けビールの価格系列を算出している15の州都・大都市圏のうち、8地域で価格が上昇し、7地域で下落した。月間の上昇率が最も大きかったのはブラジリアの1.31%で、ゴイアニアが0.93%、ポルトアレグレが0.86%と続いた。下落幅が最も大きかったのはリオデジャネイロの2.55%、ベレンの1.55%、ベロオリゾンテの0.88%だった。

12カ月間の数値では、地域差がさらに大きかった。上昇率が最も高かったのはカンポグランデの7.58%で、ベレンの7.47%、ゴイアニアの7.39%が続いた。サルバドールでは家庭消費向けビールの価格が前年同月比で0.28%下落し、ベロオリゾンテも同期間に0.03%下落した。

生産データは、比較対象となる前年の水準が低かったものの、工場部門にいくらか改善が見られたことを示した。IBGEの鉱工業調査によると、アルコール飲料の生産量は9月に前年同月比で4.4%増加した。この部門の生産量の大半をビールが占める。前年2025年9月には6.3%減少しており、今回の増加で回復したのは、前回の減少分の一部にとどまった。

それでも、アルコール飲料の生産量は12カ月間の累計でプラスに転じた。生産量は12カ月間で0.9%増加し、プラスとなるのは2025年5月以来初めてだった。同年の年初には、12カ月間の累計がマイナス3.6%まで落ち込んでいた。清涼飲料水や水を含むノンアルコール飲料の生産量は前年同月比で0.6%増加し、12カ月間では1.4%増となった。

これは、9月のブラジル鉱工業全体が前年同月比で2.5%減少したのとは対照的だった。減少幅は2024年3月以来最大となった。IBGEによると、前年の鉱工業全体が2025年9月に2%成長していたため、比較対象の水準が高かったことが影響した。

アルコール飲料とノンアルコール飲料を区別しない州別の飲料生産データでは、系列が得られる13州のうち8州で成長が見られた。9月の前年同月比の伸び率はマラニョン州が23.8%で最も高く、セアラー州の20.5%、ミナスジェライス州の16.6%が続いた。減少幅が最も大きかったのはパラー州の9.6%、アマゾナス州の7.0%、サンパウロ州の3.3%だった。

9月に成長した州の中にも、12カ月間では弱さが見られる地域があった。セアラー州は12カ月間で2.8%減、ゴイアス州は5.0%減、バイーア州は4.4%減だった。12カ月間でプラスを維持した州は7州で、リオグランデドスル州が11.9%、ミナスジェライス州が10.6%と上位を占めた。